

合がある。例え *streyān* (p. 64); *bhūma* (p. 88); *kosah* (p. 111); *mano* (p. 111)。これらに誤植と云ふものと恐われない。

インダ思想を西洋的価値の概念と比較した最初のインダ人は M. Hiriyana (cf. p. 13, ft. 1) の *śāstra* が、現在では P. T. Raju (cf. Charles A. Moore, *The Indian Mind*, Honolulu: University of Hawaii Press, 1966, pp. 183-215) の *śāstra* T. M. P. Mahadevan (Ibid., pp. 152-172) 等が、この概念を用いてインダ思想を西洋に向けて紹介している。西洋の学者としては恐らく Tahinen が最初であり、またこれ程にインダ哲学が価値の哲学であることを立証しようとした学者は存在しない。本書は色々不満の点はあるとしても、インダ哲学研究者に新しい観方を示しており、かつ従来のインダ哲学概説ないしインダ哲学史に関する書籍が扱わなかった問題を真正面から扱っている。やはり、一例を挙げれば、インダ哲学について西洋の学者は『*pessimistic*』である、と言う烙印を押すのに対し、著者は *pessimism* が現状に対する不満である、とすれば、これは本源的には *value-ideal* であり、善きものとはすでに現に在るものではなくして、『*what ought to come into existence or of which we ought to become aware*』(p. 28-29) 価値の哲学の立場から新しい解釈を与えている等、い

へつこの注目すべき見解を含んでゐる。

(Unto Tahinen, *Indian Philosophy of Value* (Sarjanta Ser. B Osa-Tom. 106), Turku, Turun Yliopisto, 1968, 124 pages.)

オスマン朝史編纂委員会編

『詳説オスマン朝史』

護 雅 夫

本書は六巻からなる。第一巻(一九五七年、六〇八頁)は、はじめに、匈奴・突厥・カラハン朝・大セルジュク帝国・アナドルセルジュク朝などの歴史を概観したのち、オスマン・ガーズィ(オスマン一世)の建国(一二九九)からメフメト二世(一四五二—一八一)までを、第二巻(一九五八年、一一八三頁まで)は、バイエズィト二世からスレイマン一世(一五二〇—一五六六)までを、第三巻(一九五九年、一七九二頁まで)は、セリム二世からアフメト一世(一六〇三—一七一七)までを、第四巻(一九六〇年、二三六八頁まで)は、ムスタファ一世からムスタファ二世(一六九五—一七〇四)までを、第五巻(一九六二年、二九六〇頁まで)は、アフメト三世か

らマフムト二世（一八〇八—一三九）までを、そして、第六卷（一九六三年、三六八〇頁で終る）は、アプデュルメジトから、オスマン朝最後のスルタン、メフメト六世（ヴァフデッティン、一九一八—二二）までを、それぞれふくんでいる。

トルコでは、一般に、オスマン朝史を、主としてその政治的勢力の消長を規準として、(一)創業期（一二九九—一四五三〔コンスタンティノープルの占領〕）、(二)繁栄期（一四五三—一五七九〔ソクルリメフメトIIパシャの死〕）、(三)停滞期（一五七九—一六八三〔第二次ウィーン包囲攻撃の失敗〕）、(四)衰頹期（一六八三—一七九二〔ヤッシー条約の締結、改革運動の開始〕）、(五)崩壊・滅亡期（一七九二—一九二二〔スルタン制の廃止〕）の五期に区分している。本書も、はじめは、これにしたがって、五卷に分け、それで完結するはずであったが、それが不可能になり、ついに、さらに一卷を加えなければならなくなったという。しかし、叙述に当っては、上の五期に分けて、まず各時期の政治史をしるし、それぞれの末尾に、その時期の軍事・行政そのほかの諸制度、社会構成、文化などを簡単にまとめている。このため、全体的に見て、政治史偏重のそしりはまぬがれない。つまり、本書は、一口にいえば、きわめて詳細なオスマン朝政治史の概説で、この点、「詳説」の名に恥じない。

オスマン朝史の詳しい通史としては、トルコ歴史協会

(Türk Tarih Kurumu) から出ている「オスマン朝史 (Osmanlı Tarihi)」のシリーズがあるが、これは、あくまで研究者を対象としている。これにたいして、本書は、序文にも言うように、「教師・学生・非専門家をふくむ一般読者」むけに書かれている。挿絵・地図——われわれにとっては非常に珍らしくまた有益なものが少なくない——を豊富に掲載し、読者の便に供しているのも、そのためである。こうした啓蒙的性格をもった、しかも、これほど詳細なオスマン朝通史は、わたしの知るかぎり、ほかにはないようである。これが、本書の第一の特徴である。

啓蒙書といえば、興味本位に書かれたものを想起しがちであるが、本書では、スルタン・王妃・寵姫・王子・宰相そのほかに関する、興味ふかい逸話などを各所に挿入しつつも、できるだけ正確な歴史をトルコ国民に知らせる、という態度が堅持されている。啓蒙書とはいいながら、本文の主な執筆者ムスタファ・リジャール (Mustafa Cezar) が、各編纂委員の意見によりつつ、随所で厳密な史料批判を行ない、通説の誤りを正しているのは、その一つのあらわれである。各巻の巻末にあげられた、根本史料（写本ならば所蔵図書館、写本ナンバーが、刊本ならば発行地、発行年が付記されている）をはじめ、きわめて専門的・学術的な著書・論文（ほとんどすべてトルコ語）をふくむ文献目録は、一般読者のみなら

ず、研究者にとっても便宜を与えてくれる。これが、本書の第二の特徴である。

このことと関連するのであるが、本書には、本文とはべつに、非常に多くの「参考記事」が挿入されている。たとえば「オグズ伝説」、「オスマン国家は一二九九年に建てられた。しかし、独立したのは何時か」、「オスマン朝におけるスルタンの称号」、「王子バイエズイトの結婚」、「ティムールとバイエズイトとの間の往復書簡」、「ヨーロッパへ派遣された、最初のオスマン朝使節」、「大宰相について」、「ディーヴァーンとは何か」、「フアーティフ（征服王メフメト二世）の母」、「オスマン軍隊における大砲」、「フアーティフの法典」、「フアーティフ・メフメトは何ヶ国を征服したか」などという記事が（以上の例は、第一巻から拾い上げたものである）、根史料の原文または参考文献とともに、それぞれ適当な箇所に入れられている。これらの主たる筆者はミット・ハット・セルトゥル (Midhat Sertoglu) であるが、この「参考記事」は、同じ筆者の手になる「挿図付きオスマン朝史百科事典」(イスタンブル、一九五八年) とともに、たんに通史だけでなく、個々の事項についてももっと詳しいことを知りたいと思う読者の願いをかなえてくれる。これが、本書の第三の特徴である。

(Resimli-Haritali Mufassal Osmanlı Tarihi, 6vols., İstanbul, 1957, 1958, 1959, 1960, 1962, 1963.)